

金子光晴全集



第七卷



金子光晴全集

第七卷

金子光晴全集 第七卷 著者金子光晴 装幀者司修 発行者高
梨茂 印刷者山田博 発行所東京都中央区京橋二丁目一 中央公
論社 電話(五六一)五九二一 振替東京二二三四 ©一九七五

昭和五十年十一月十日印刷
昭和五十年十一月二十日発行



自伝

Ⅱ

目次

どくろ杯

5

ねむれ巴里

153

西ひがし

329

後記

463

どくろ杯

発端

みすみするく結果にはならないとわかっていても強行しなければならぬなりゆきもあり、またなんの足しにもならないことに憂身をやつすのが生甲斐である人生にもときには遭遇する。七年間も費して、めあても金もなしに、海外をほつつきまわるような、ゆきあたりばったりな旅ができたのは、できたとおもうのがおもしろいあがり、大正も終りに近い日本の、どこか籬の弛んだ、そのかわりあまりやかましいことを言わないゆとりのある世間であつたればこそできたこととおもう。あの頃、日本から飛び出したいという気持は私だけではなく、若い者一般の口癖だったがそれも当時は老人優先で青二才にとって決してくらしよい世の中ではなかったこともあり、また海外雄飛とか、「狭い日本にゃ住み倦きた」とかいふ、明治末年人の感傷がようやく身に遠いものになり、大正っ子はお国のためなどよりも、じぶんたちのことしか考

えられなかった。

日本からいちばん手軽に、パスポートもなしでゆけるといふと、満州と上海だった。

いづれ食いつめものの行く先であつたにしても、それぞれニュアンスがちがつて、満州は妻子を引きつれて松杉を植えにゆくところであり、上海はひとりものが人前から姿を消して、一年二年ほどぼりをさましにゆくところだった。私の年長の友人の前野孝雄のように、袴羽織で満蒙へ出かけて行った浪人たちは、しきりに日本の捨石になる覚悟を広言したが、上海組は行ったり来たりをくり返して、用あり気な顔をしながら、なにもせず半生を送る人間が多かった。上海の泥水が身に沁みこむと、日本へかえってきても窮屈で落付かないのだ。そんなわけで私も、前年妻同伴で、上海から蘇、杭、南京と江南を二ヶ月ほど廻りあるいて帰ってきた気らくな味（きたないことが平気になれば、物価がやすく、くらしの上でうるさい世間がないことが魅力であつた）が忘れられず、その歳の春は、友人夫婦をそのかすようにして、東道役を買って上海にわたつたが、端なくもそのことが原因をつくつて、おなじ年の臘月にまた、止むに止まれぬ事情で、幼い子供を長崎の妻の実家にあずけて、妻とふたりで、三度目に瀝の土地を踏むような仕儀となった。そして、その旅がそのまま延びて、爪哇（現在のインドネシア）馬來を半歳、三月と

泊りをかさね、パリ、ロンドン、ブルッセルと、七年にわたる長旅になってしまったのだが、方がふさがっていると承知しながら敢て出発する決意をしたのは春申の故地が招くのに先ずころがうごいたからであった。さて、この旅を組くみにのせて料理をするとなると、どこから庖丁を入れて、どうおろしたらいいのか、さっぱりわからない。四十年以上もむかしのことで、記憶は磨滅し、風物が霞むばかりか、話の脈絡も切れ切れで、おぼつかないことが多いが、それだけにまた、じぶんの人間に出せない所行を他人のことのように、照れかくしなくさらりと語れるという利得もないではない。

大正十二年九月一日（一九二三年）関東地方に大地震があり、東京、横浜に大火災が起り、燃えふすばった瓦礫がれきのあいだに、十万人の焼死者が、松の木杭ぼうちのように赤膚になってごろごろがっていた。震動の恐怖はそれ程のことはないがぶちまけられた災害の地獄図の一つ一つのデータユがたくまずして精緻巧妙を極めて人をして慄然たらしめるものがあつた。対岸の火事で本所深川べりの大川の水は湯になり大川べりはトピ口で引きあげた屍体の山となった。そんな場合にも人間の欲望だけは積極的で、性別もわからなくなって膨脹した屍体の指から指環を取る盗人が裁物缺で指を切つて合財袋に一ぱいあつめた金銀宝石といっしょに捕われた話もある。

火災による死者は十万と言われ、旋風による頭大の大石小石が、焼トタンといっしょに逃げ場を失つた男女の上から落ちてきて眼前で全身が裂かれ、脳漿がとびちる惨状を目のあたりにせねばならなかった。十日のあいだ、どこかで火はいぶりつづけ、樺火くわくわのように下火になっては燃えあがり、魔法つかいのお婆さんが指図でもするように、黄いろに、朱あかに、螢へんたいろに、ネオン紫に、並んでみたり、跳はび越したりして、狐火のようにゆれるありさまは、みているだけならうつくしきさえあつた。ふりかえってみると、あの時が峠で、日本の運勢が、旺さかから墓はかに移りはじめたらしく、眼にはみえないが人のころに、しめっぱい零落の風がそつとしのび入り、地震があるまでの日本と、地震があつてからあとの日本とが、空気の味までまったくがったものになつてしまったことを、誰もが感じ、暗黙にうなずきあうようであつた。乗っている大地が信じられなくなったために、その不信がその他諸事万端にまで及んだ、というよりも、地震が警告して、身の廻りの前々からの崩れが重つて大きな虚落になつていることに気づかせられたといつたところである。この瞬間以来、明治政府が折角築きあげて、万代ゆるぎないつもりつもりの国家権力のもとで、心をあずけて江都以来の習性になつたあなたまかせで安堵あんどうしていた国民が、必ずしもゆるぎのない地盤のうえにいるのではなかったといふことを、おぼろげながらも気が付きは

じめたようにみえた。国民といっても、ごく一部の、それも個人の心の片すみで、不安定に、たえず打ち消されそうになりながらのわずかな違和感や、小さな不安が、大きな心落しや流離とどこかでつながっていることを知らさせる機が多くなった。とりわけ人々に激しい衝撃を与えたことと言えば、天災地異のどさくさにまぎれて、一人の青年将校とその部下の上等兵とが、著名な社会主義者夫妻を拘禁し、甥に当る六歳の子供といっしょに扼殺した事件であった。大正のリベリズムの息を吸った人民への、不人氣の底にいた軍のいやがらせともとれた。世論の追究にもかかわらず、博徒が身内を庇うように、うやむやのうちに犯人たちの身柄を法治外の半植民地の満州にかくし関東軍の泥沼へドロで太らせた彼らを、中日戦争のはじまるまでひそかに庇い通してきた。三文キネマの悪代官や泥顔役を彷彿させる。私の不器用な旅のきっかけは、遼（りょう）つて、あの地震のころにはじまったということができる。

その歳の七月に私の詩集『こがね蟲』が出て、先輩詩人福士幸次郎の肝煎りでその月のうちに銀座尾張町のレストランの二階で出版記念会があった。それから一ヶ月あまりたった九月一日に、これからの私の希望や、計画を土崩瓦解させるためのように、平等に大地がのたうちそのうえのものの評価を御破算にかえた。賛否の批評をのせて出る筈の雑誌出版

社は焼け、文学者詩人の行衛もわからなくなって、文壇はふたたび元通り立直らないのではないかというのが我人の実感であったが、若さとは怖れをしろなもので、一時はこころの張りも失われたようにみせかけながら、焼土の焼瓦にのせた玄米のにぎりめしと水トンばかりのゆすぎ水のような胃の腑で、私たち三流詩人は、三里の道のあるいて仲間をたずね、この不時の季節からえた危険なことばについて語りあった。

私から『水の都市』（アンリ・ド・レニエ）が消え、ルネ・ギルとある無名なシルクハットとバラの詩人が胸をそらして登場した。これは、戦争のあとで、猿ぐつわをとって出てきた一ダース、二ダースの今日の戦後派の詩人たちと条件がよく似ているが、私の世代では、肩をくむあいてがいなかったことがちがっている。私の風態がわるくて、警戒され、泥棒の仲間入りをさせられるのではないかと思ったのかもしれない。そんなことはともかく、あの秋は暑さがひどく、十月になってもじりじりと油照りの早天がつづき、その上、時々強い余震が人をおびやかした。しかし、この天災は、後になって考える私のしまりのない性格からくるいい気な日常にきまりをつけるための気付薬でもあった。あのトビ口にかけて人夫が片付けている焼死体をみたことだけでも無常を感じさせるに足りたが、もとより私達は菩提心から遠い。

しばらくたつと、焼けのこった牛込赤城元町の崖下の小家

の玄關わきの三疊間の私の部屋に、尾羽うち枯らしたような姿で、焼け出された人たちがやってきては、裏の出入り口からのぞきこんだ。深川で一家が川のなかに首までつかって命びろいをしたといつて、福士幸次郎がまず顔をみせると、鳥追い女のように裾端折りして、くくり草履ぞうりの百田宗治のものと妻のしをり女史のいたいたしくもなまめかしい姿が、しなしなどあらわれた。浅草山の宿に住んでいた肉親たちの生死も、十日ぐらいいは不明だった。一ヶ月もたつてから、ようやくいろいろな人たちの消息がわかりはじめた。下町に縁つづきの多い金子の亡父のひっかかりの人たちのなかには、とりわけ悲惨なことが多かった。亡父が勤めていた建築業「清水組」のしよかたの老夫婦が被服廠に避難して何万人といっしよに蒸焼きになった。親戚の古着商の番頭筋で、反物のせりやをやっていた男は、両腕の手首から先を失って、訪ねてきた大火による気温の変動でおこる突風に出あって、日暮里駅の引込み線の線路を両手でつかんだまま、砂礫に眼もあけられずじっとつくばっている、風に押された荷物列車が音もなく線路を這ってきて手のうえを通ったのを、そのときは、なにかたいへんなことが起ったとおもっただけで、痛さも感じなかったとかたった。そんな残酷物語をならべたら、はてしがない。帰省して学生たちがかえっていなかったことは、彼らにとってさいわいであった。

詩人になろうとして、私の三疊部屋にあつまってくる少年たちも、殆んど東京にいなかった。小日向水道町の三等郵便局の息子の、声こゑの上うへな宮島貞丈までが、埼玉に行っていた。小松信太郎も、福島に帰っていた。まっ赤な絵具をべたべた塗る画家の卵の牧野勝彦（のちの牧野吉晴）も、名古屋の親の家にかえっていた。身辺素漠なうえに、しごとの出鼻を折られて、つづける意欲もなくなり、東京にいても満目蕭々といたましいだけで、ぼやぼやしているうちに、売喰いの品物もなく、質草もなくなっていた私は、全く生計のめども立たなくなり、風待ちをする舟のように、ただ、あてのない運命のうごき出し、偶然の誘いのあるのを待つだけであった。

オイデマツ、と名古屋の牧野からの一本の電報をいのち綱のようにその日のうちに片道の旅費を借りあつめて、夜行列車で東京をあとにしたのも、この機を外はずすのを懼おそれるあまりであった。牧野の家は、市の場末の清水町というところにある、へいつくばったような低い平家ばかりの、むだなあき地の多い家つづきの一軒であった。牧野の父は退職の陸軍騎兵大佐で、いかめしい軍人髻を生やしていたが、無口で、好人物であった。瘦やせて骨張った父親とくらべて、肥りすぎで、いつも息をせいせいさせている母親は、世話好きで人を信じやすく、裏切られてもさまで気にも止めないようななつっ

こい人柄だった。勝彦を惣領に、満彦、泰彦などの男の子と、正子、つが子、八重子などの女の子たちもあって、男の子たちは、別棟の亜鉛屋根の小屋に起居して、寝るときは一枚の掛布団を二人三人でひっぱりあひながら寝た。その布団は着古したきもので、紺や、紋付までもはぎ合せてあったし、古綿が寄ってごろごろしたあいだにきればかりになったところもあった。子供たちといっしょを申し出て、餓鬼大将になってくらしたが、敗竄の末、東京を脱出した私には、その生活程、野心や執着を忘れ、こころのいたみを消し、悲しみから遠ざかるためにこんな場所はないとおもわれたので、できるなら、いつまでもその場をうごきたくなかった。当時の勝彦は、ものに憑かれたように私に傾倒し、私の言動には、理非なくくつついてきた。そうした人間関係は、ふかいほど大きな危険を伴い、あいてが成長して、じぶんのつくした誠実がばからしいと気付いたとき、さっぱりと離れてゆくだけではまず、反逆で返しを取ろうとすることも、ままありがちなことである。たとえ、そのとき私が充分そのことを承知していたにしろ、すすんで道化をつとめる彼となれあって、わがさびしさをなくさめることで救われるよりほかに、方策もなかった。裏木戸を出ると、すがれた原っぱにつづく道があった、その道の片側にもとびとびに屋根の低い家があった。その一軒には、昼もうすぐらい部屋のなかに、まるい頭がい

くつかみえて、老若の尼さんたちが住んでいた。尼たちは、神妙に動行をしているときもあるが、からかって通る若い衆たちに、名古屋弁のみだらなことばで、応酬していることもあった。尼という存在には、人生のいちばん低い溝河をながれる水のような、ひそやかないのちのながれがききたれた。さすらいのはじめにきいたそれが最初の人間内奥の極秘の源流であった。煎餅の紙袋をおくり届けることをおもいついて、勝彦とつれ立ってゆき、私が入り口に待っていると勝彦は私の手前、つけ元氣をして入っていった。入り口の小庭につわぶきと、蕾のふくらみかけた茶の木があり、底つめたい十一月の風が陽のささない家のまわりをさわ立てて通りぬけていた。私のこころを推測して勝彦は、若い尼を一人つれ出してきた。顔立ちとはとのつていたがその尼は顔いろがわるく、特別な病氣でももっているようなしずんだいろをして、人間の体臭とはちがった、籠えたような臭いを身邊にただよわせていた。誘うとどこまでもつてきた。名古屋城のみえる街道のふきさらしの、車屋台のどて焼店につれてゆくと、彼女は、濃厚な名古屋味噌で煮込んだ芋や、コンニャクを、猫舌らしくさめるのを待っては、がつがつとむさばり食った。勝彦と私は、顔を見あわせては、尼の側頭骨の張った坊主頭と、こめかみのいそがしくうごくのを眺めていた。この旅の第一の宿場、名古屋での一ヶ月の逗留は、なにごともないと

いうことにつきていたが、旅のもたらす解放感までも、東京での悲慘が尾を曳く憂愁のおもいでおしつぶされていた。なにごともない名古屋ぐらしのあいだにあった、ほんの瑣細なショッピングなできごとといえはこの尼のことと、勝彦が、私に会いたいということであつてきた井口蕉花という男のことである。小柄なうえに猫背で、追いつめられた小獣のような哀しい表情で、からだに合わない大きな二重廻しの外套を着たまま、畳のうえにべたりと坐つた彼は、どんなことを牧野に吹きこまれてきたのか、なにか私が、彼のために労をとつて、してやれる能力でもあるかのように、ぶつぶつとなにごとかをたのみこむのであつた。井口はむかし、本間五丈原という名で『秀才文壇』に詩や、短文を投書していたことがあるという。本間五丈原なら私もその名をよく知っていたが、どうしてもこの男とは結びつかないので再三たしかめるようにたずね返した。しかし、こうした一見みじめそうな男の内部でゆらいでいる焰が、時にはきらびやかであつたりするものらしく、彼がみてくれともつてきた詩をみて、私は、意外なおもいをした。勝彦につれられて私は、彼の仕事部屋をたずねた。彼は、瀬戸の陶磁器の下絵をかくのがしごとで、そのときも、紅茶茶碗の受け皿のこまかいつなぎ模様の絵を、紙に眼をくつつけるようにして描いていた。そのとき彼は、名古屋の詩人のため私にいつまでも止まるとほしいと言つた

が、私は、「それはむずかしい、牧野の家でよくしてくれても、そういつまでも世話は掛けられないし、この土地で生計を立ててゆく途もない。それに名古屋の詩人の面倒をみるなら高木君のような適当な人もいる」とさとするように言つた。高木君というのは、佐藤惣之助の弟子の高木ひさ雄のことで、陶磁器の釉の問屋の件で、家が裕福だつた。井口は、淋しそうにしばらく私の顔をみていたが、なにをおもつたものか、ながい紐のついた汚い巾着をふところからひき出し、古だたみのうえに逆さにふつて、なかの銀貨をぶちまけ、それをまた、一枚ずつひろつて積みあげた。五十銭銀貨ばかりで、二十枚ほどの高さで三つほど積んだ。そばの勝彦もしんとなつてそれを眺めていた。どういうつもりのある舞なのか、私にはよくわからなかったが、金のことなら心配するなということか、これだけ儲けるしごとがあるということか、そうして見せなければ、口では表現できない、さしせまつたわけでもあつたのか、そのときはっきり聞けなかつた私の弱気が、あとまでも、心情のゆきとどかなさとなつて、ここにのこつたものだつた。若さというものは、未熟なものだ。念の足りなさや、つまらぬブライドや、ゆきがかりで、ことの軽重を見失つたり、ころろとはうらはらなことをしたり、言つたりした。若い毎日は、いくら惻口ぶつてみても、偏見と無慘の多いものようだ。井口の家からのかえり路、勝彦は「あれ

は、あなたに使ってくれという気持ちで、気が弱くってそれが言えないんですよ」と、彼なりの解釈をしたが、その解釈は、心がひどく痛みやすくなっている私には、私の物欲しさを知って私のために代言してくれたことばのようにおもえて、かなしかった。勝彦は、なんとかして私のところを引立て、私のためにゆく先を切り開いてくれようとするのだったが、弱年の彼を世間があいてにしてくれなかった。彼は、私の不遇を憤り、私に代って憤懣を抱き、あちらこちらにいて、東京の詩人文士を嘲罵した。私は、それを制止する気の張りあいもなく、呆然とながめているばかりか、その幼い身内びいきの心情にかえってころなくさめられさえた。清水町には、うかれ節や、旅芝居のかかるふるい小屋があつて、私と勝彦は、夜になるとさむざむとしたその小屋で時間をすごした。地元のうちかれ節語りの原嘉六や、港家儀蝶、大阪から中川伊勢吉や海老蔵、藤川友春（頼で、御簾をかけたなかで語った）などの大物までがきて二夜さぐらいつづけてうってゆくこともあった。ふしにかかると勝彦は、釣られてひょこひょこ尻をうごかした。正月には素袍大紋姿の正式な御前万歳をみる事ができた。この小屋の木組は、またすばらしく、日本人の智慧の組木の粋をあつめたような細工だったが、空襲を待たず、類焼してしまったという話だ。黒土が干いて白っぽけた師走^{しゅうさ}近い名古屋は、道に霜枯れた大根の葉などが落

ちているいなくさい、怪しい町で、どこの家のくらしも、もの哀しそうだ。うかれ節の義理人情をききくる人たちは、それでも年輩の人ばかりで、二十九歳（かぞえ歳）の私と、十八歳の勝彦は若い客だった。勝彦の父は、恩給ぐらしですることもなく、薄水の張りはじめたお城の外濠へ、魚を釣りにいったりして日を送っていた。鯰^{なまず}が釣れたりすると蒲焼をつくって、本屋^{ほんや}から、女学校に通っている娘の正子を使い私をよびにきた。晩酌をやりながら彼は、日露の役で、乃木大将の部下の中尉で聯隊旗手に拔擢されたが、南山の大激戦のとき、大酔して正体なく、聯隊旗を敵にとられたが、大将の寛大なばかりで事なきをえた話を、短いことばでぼつぼつと語った。息子の師匠というので、若輩の私に改ま^たつた言葉づかいをしたが、酒が終る頃になると居ずまいを直し、軽はずみで、心課^{しんか}がしい作が、詩人となって将来成功する見込みがあるだろうかと、訥々^{うちや}と口ごもりながら、人もあろうに本人がまだ駆出しで、海とも山ともわからないうえに、この頃では、半分は詩など捨ててしまおうとおもっている私にたずねるのであった。勝彦には天才的降神状態があるから、詩か絵で、非凡なしごとをするようになるかもしれないなどと、私以上にゆく先の吉凶のわからない勝彦について、氣をもたせるようなことを無理して言わねばならなかった。私をはじめ勝彦や、弟たちも、誰がその発頭人かしない

が、いんきんたむしという、陰部のヒフ病にかかっていっしょに生活しているのでみんなに伝染した。誰もが見られないようにして胯間^{くわかん}に手をさし入れてポリポリ掻いていたが、掻くほどにひろがるばかりなので、一同を車座に坐らせ、私がくすり瓶についた房楊子のようなちいさな刷毛で一人々々くすりを塗って廻った。たしか、ヨージ水という名のくすりですりつけるなり、硫酸でもぶっかけられたような熱さで、薬丸^{りやうがん}がちぢくれあがるのであった。「強いぞ。強いぞ」と言っていて、私は一人々々を団扇であおいだ。歯を喰いしばってもものも言えず坊主共が結跏趺坐^{けつかふたざ}しているところへ、のぞき込むようなかつこうで、井口蕉花がはいってきた。気をのまれたようにその光景をじっとながめていた井口は、やがて二重廻しの裾をひらき、黙って敷くれた前ものをつまみ出して人の輪のあいだのあいた場所に胡坐をかいて坐った。仲間入りの儀式とでもおもったらしい。笑い話とするには、ところが切なくなるような話である。私のふるさとに近いこの都会は、日本の中心部にありながら、風景はさむざむとして旅のころを愁殺^{しうがい}し、東海の遊俠氣質^{ゆうぎあひ}がのこっていて、ふれる人のころがいじらしい。そもそも日本人というものが一人ずつにするとみんな泣虫で、その泣虫をじっとこらえて意地張り、弱味をみせまいと力みかえて生きている。そしてみせかけだけの強さは、権力とか、偶像とか、義理情誼^{ぎりじょうぎ}のしがらみとか、

すがりつくものがなければ、手もなくがさりとくずれてしまう。あの頃の名古屋の庶民のなかに生きているのは、天野屋利兵衛や、紀国屋文左^{もんざ}門、それから野狐三次など、うかれ節、祭文の素朴なモラルであった。名古屋ばかりではない、それは、日本の津々浦々まで、酒樽^{さかづき}といっしょについて廻る、万人共通の陶酔^{たうすい}のメロディで人々の心に煮^なめめた醬油^{しょうゆ}の味のように滲み入り、明治、大正、昭和と倦^あかれもせずに受けている。今日猶、テレビやラジオでそのままがされ通用している。名古屋は、そんな鈍色^{ぬみど}がかった、泥くさい、万金膏^{まんだい}のようにべったりと心に張りついてくるころのように、始終、感傷的だった私には感じられた。

同郷の津島生れの先輩の野口米次郎先生の文芸講演会が名古屋市の公会堂のような場所で開催され、私はその前座をつとめることになった。牧野のお父ちゃんんの袴^{はかま}を借りて、生れて始めて大勢の前でおしゃべりをするので婿入りでもするような騒ぎで、出かけていった。野口先生の話は、会場の照明を消して、テーブルの上に二つの燭台を立て、蠟燭^{ろうそく}のあかりだけで、幽玄神秘的雰囲気^{ゆうげんめいせき}のなかで講演に劇的效果を出そうという趣向^{しゆきやう}だった。そうした先生の舞台効果も、野次馬学生^{やしまがくせい}の半畳^{はんじやう}のためにめっちゃめっちゃになった。私の話は論外で、箱河豚^{はこぶた}のようにコンコチになってしゃべったことの前後もそろわぬままに途中で引込んだが、講演の謝礼や、そのほかに工